

発刊の辞

吉 武 潤 一*

このたび「侵襲時の体液・代謝管理」が発刊の運びになったことは、長年この分野の仕事を続けてきた筆者にとってこの上ない喜びである。本誌は麻酔科、検査部、人工透析などに関与しておられる人達の要望をうけて昭和60年に発足した侵襲時の体液・代謝管理研究会の成果を記録に留めたいという考えで発刊に至ったものである。研究会発足後直ちに研究会誌を発刊することには、多くの困難が予想されたにもかゝらず、今日その実現を見たのは、偏えに関係各位の熱意と努力、ならびに賛助団体の絶大な御支援があったためであり、深く感謝の意を表するものである。

すでに輸液や代謝に関係のある研究会がいくつも存在する今日、敢えてこの研究会を発足させた主旨について述べておきたい。今日科学の発展は誠にめざましいものがあり、それに伴って医学の分野でも高度化と多様化が促進されている。臨床各科はそれぞれの専門分野で、技術的極限を追求しようとする“高度先進医学”志向型となり、積極的かつ攻撃的な治療手段が多用される傾向になっている。

このことは麻酔科医のように、患者の生命維持を主たる任務とする医師にとっては極めて重大な事態と言える。ところで患者の生命維持とは、基本的には患者の生体を構成する各細胞に、酸素や代謝基質の供給を続け、細胞の機能遂行に必要なエネルギー産生を維持させることであると考えられる。重症症例の管理にあたって、これらを適切に実施するには、今後さらに体液と代謝の問題を統合的に研究して行くことが必要であろう。このような見地から本研究会では、侵襲時の生体において体液や代謝の状態を知るためにどのようなデータを収集するか、得られたデータをいかに効率よく伝達するか、それをどう解析し、利用するかなどが主要なテーマとしてとり上げられることになるものと思われる。

本研究会誌には第1回研究会で発表された講演ならびに特別講演を掲載したのみでなく、創刊号でもあるので次のような特別寄稿をいたした。まず帝京大岡田教授には侵襲学の解説をお願いした。岡田教授は Claude Bernard や H. Lavoisier を生んだフランスに留学されたこともあり、侵襲学には並々ならぬ関心を持たれており、本誌の主旨にマッチした内

*Junichi Yoshitake

九州大学 医学部 麻酔科 教授

〒812 福岡市東区馬出3丁目1-1

容になったことに感謝している。

また国立循環器病センターの片山、大阪大の林岡先生には緊急検査のコンピューターシステム化の問題をとり上げていた。手術症例や重症患者の管理において、患者の重篤度や治療効果の判定に必要となる検査データは今後増加の一途をたどるものと考えられ、それにどう対応するかという点で多くの示唆に富む論文と考えられる。

次に L. Roujon 著の Vincent Bio-electronics, theory and application の和訳を掲載した。筆者は約20年前から体液と細胞代謝の関係を知るために、血液の酸化還元電位の測定が有意義であることを述べてきたが、測定用電極の性能に問題があり、臨床応用に至らず放置されてきた。西欧では当時から電極の改良が進められ、今日では臨床応用可能な機器として完成し、Med-Tronik 社から発売されている。本器を用いた筆者らの臨床応用の成績の一部は本誌に発表されている。L. Roujon の論文は、Bio-electronics の理論と応用に関して明快に述べており、今後この分野に興味をもたれる人に対するよい手引きとなると思われる。

救急医療や重症患者の治療において、侵襲時の体液と代謝の管理は極めて重要な分野であり、上記のような新しい試みも加え、今後多くの問題が解明され、臨床応用の道を開くことが期待されている。本研究会がこの分野の開拓に貢献することができ、価値ある論文がこの研究会誌に長く留められることができればというのが筆者の願いである。今後本研究会と研究会誌が発展して行くよう一層の御協力をお願いする次第である。